

女川原子力発電所2号炉 指摘事項に対する回答一覧表
(竜巻防護ネット)

No.	項目	審査 会合日	対応状況	回答
1	竜巻防護ネットの構造設計について、想定する設計飛来物の抽出の考え、それら飛来物が侵入する方向及び防護ネットに対する荷重伝達の影響を整理して提示すること。	H29. 10. 26	H30. 5. 31 H31. 2. 12	竜巻による設計飛来物の設定は、ワークダウンで網羅的に抽出した想定飛来物を分類、評価して設定し、「鋼製材」と「砂利」を選定した。(資料 2-1-2 にて平成 30 年 5 月 31 日説明済) 竜巻防護ネットの構造設計において想定する設計飛来物は、上記と同様であること説明した。(資料 1-2-3 にて平成 31 年 2 月 12 日説明済)
			H31. 2. 12	竜巻防護ネットへの飛来物が侵入する影響については、衝突方向が部材に与える影響を踏まえて、水平部材に対しては最大水平速度、鉛直部材に対しては最大鉛直速度を適用して評価する方針とした。また、ゴム支承を介した荷重の伝達においては、ゴム支承による荷重の低減、分散効果を期待しない評価を実施する方針とした。(資料 1-2-3 にて平成 31 年 2 月 12 日説明済)
2	竜巻防護ネット支持構造物について、構造仕様の詳細を提示すること。また、ゴム支承は支持構造物の固有周期を長周期化させることによって、下部構造である耐震壁の発生応力を低減しているものと考えられるが、長周期領域を考慮した基準地震動を新たに策定する必要があるかどうかを検討するため、振動特性等の施設の特性を提示すること。	H29. 10. 26	H31. 2. 12	竜巻防護ネットの振動特性（固有周期やモード図）を確認し、固有周期が 1.0 秒以下であることを確認した。 (資料 1-2-1 にて平成 31 年 2 月 12 日説明済)
3	設計飛来物に対する防護の設計方針について、竜巻防護ネットの支持部にゴム支承や可動支承を採用することにより、必要となる設計上の特段の配慮又は対策を整理して提示すること。	H31. 2. 12	本日回答	竜巻防護ネットの支持部にゴム支承、可動支承を採用することより、必要となる設計上の配慮又は対策を整理し、衝撃荷重に対するゴム支承、可動支承の影響を考慮した設計方針を示した。これらの設計上の配慮又は対策について適切に設計へ反映し、竜巻防護ネットを設計する。 (資料 1-2-1 にて説明)
4	道路橋示方書、道路橋支承便覧の適用性について、竜巻防護ネットの構造形式及び他の参考文献等を踏まえ、整理して提示すること。	H31. 2. 12	本日回答	竜巻防護ネットの耐震設計に適用している道路橋示方書、道路橋支承便覧について、設計の考え方を整理し適用性に問題がないことを確認した。 (資料 1-2-1 にて説明)

No.	項目	審査 会合日	対応状況	回答
5	耐震設計上の既工認実績の有無について、体系的に整理して提示すること。	H31. 2. 12	本日回答	竜巻防護ネットの設計方法に対する既工認実績の確認については、4条まとめ資料別紙-1に整理しており、その内容を概要に追記した。(資料 1-2-1 にて説明)
6	ゴム支承及び可動支承を用いた構造物の地震応答解析手法について、非線形時刻歴応答解析ではなくスペクトルモーダル解析を選定した理由及び適切性を提示すること。	H31. 2. 12	本日回答	竜巻防護ネットはゴム支承も含めて、全体的に線形挙動を示すことを確認しておりスペクトルモーダル解析を適用可能であると考えている。(資料 1-2-1 にて説明)
7	各方向の地震荷重の組合せについて、ゴム支承及び可動支承を用いた構造物(固有周期が長周期となるもの)に対して SRSS 法を適用することの妥当性を提示すること。	H31.2.12	本日回答	竜巻防護ネットの固有周期は1秒以下であることを確認しており、一般的な免震装置を用いた建物の固有周期である2~4秒に比べて剛側であることから、他の機器・配管系の設備と同様に、地震による水平方向と鉛直方向の最大荷重発生タイミングは異なるものと考え、地震荷重の組合せはSRSS法を適用している。なお、工認段階において、時刻歴応答解析を実施して地震時挙動を確認するなどして、SRSS法の適用性について詳細な検討を実施する。 (資料 1-2-1 にて説明)